

計した。その結果から永久歯萌出型よりも乳臼歯う歯数のほうがより影響力が高いことが示された。なかでも乳臼歯う歯数が8歯で萌出型がⅡM型とⅠM型、7歯群でⅡM型は高いう蝕罹患が認められ、この割合は30%以下と単一要因で得られるリスクよりも選出割合が少なく、より精度の高いハイリスク選出基準になりえると考える。

【結 論】小学1年時の健診結果から得られる乳臼歯う歯数および永久歯萌出型の2要因は、それぞれ永久歯う蝕の罹患性要因であると同時に両要因を組み合わせることによって、より精度の高い判定が可能となり歯科保健管理の効率化を示せた。

13) 全身バランスの改善による矯正歯科治療

○田所 生利、廣瀬 将邦、福井 和徳
(田所歯科矯正クリニック¹、奥羽大・歯・成長発育園)

【目 的】人は直立2足歩行する際、何らかの原因で中心からずれを生じた場合、支柱を垂直にしようと、頭部、頸部、胸部、腰仙部の平衡をつかさどる部分で生理重力線からの逸脱を察知し、これがバランスをとるための生体にずれが生じる。そこで、頭部の右方傾斜、および左方移動、左右の肩の高さの違いが認められた重度な開咬症例について、バランスの改善を行うことで症状の改善が図られた症例の概略を報告する。

【症例および方法】症例：年齢14歳4ヵ月、男子身長175cmで両側の上顎側切歯欠損が認められた開咬症例で臼歯の咬合は正被蓋でoverbite-1mm, over jet7mmそして、下顎の1mm右側偏移が認められる。方法：全身バランスのスクリーニング結果に基づき、仙腸関節への整復と、頸椎への整復を行い、後戻りを防止するため、1日に1回40分の生理歩行の実施、歩行が困難な時は、スクワットを3回行うことを指示し、整復後のバランス維持に努める。矯正歯科装置は本人が希望するまでセットせず、全身および口腔内の継続的観察を行う。

【結 果】整復後2年、年齢16歳4ヵ月、身長178cmでoverbite 0mm, over jet5.5mmとover jetの改善は1.5mmと少なかったが、咬合の改善は顕著に認められ、頭部の右方傾斜、および左方移動、左右の肩の高さも改善が認められた。

【結 論】患者本人が矯正装置のセット遅延を希望したこと、仙腸関節および、頸椎の整復を受

け入れてくれたことで、全身のバランス改善が口腔内においても安定した状態を作ることを確認した。また、初診時から訴えていた頭痛、肩こり、吐き気は整復後いつの間にか消失していて、それ以来発現していない。

14) 東日本大震災における奥羽大学の取り組み (その1)

○板橋 仁、今関 肇、宇佐見晶信、影山 勝保
川合 宏仁、関根 貴仁、玉井 一樹、長岡 正博
西本 秀平、濱田 智弘、林 太一、福島 雅啓
和田 隆史、渡辺 聡
(奥羽大学歯学部災害支援班)

【目 的】東日本大震災における本学の社会貢献活動の一環として、演者らは身元不明遺体の検死業務を担当したので、その概要を報告した。

【方 法】3月11日の震災後、日本歯科医学会および日本歯科医師会から協力要請を受けた大野歯学部長の指示で、高橋病院長指揮のもと本学の検死チームを立ち上げた。県歯科医師会と分担して週の前半を受け持ち3月29日から5月31日までのべ27回派遣した。出勤には県警機動捜査隊の協力で奥羽大学と遺体検案所(元アルプス電気社屋 相馬市)を往復した。

検死では、遺体番号とともに顔写真、口腔内写真(義歯は外して写真に収める)を撮影し、口腔内診査とデンタルチャートへの記入を二人一組みで行った。検死マニュアルでは見落としを防ぐためダブルチェックが原則であるが、遺体の数が多い現場では記録したチャートを読み上げて再確認するという代替法で、現場対応のダブルチェックとした。根管処置など生前記録が残されている可能性が高い部位を中心にエックス線写真を撮影した。検死後すみやかに、画像を現場のパソコンに保存した。

随時、生前記録との照合判定を行い「同一人物の可能性が高い」場合には、警察官立会いのもとに判定結果を遺族に説明した。

【結 果】本学の検死派遣27回における当日業務をまとめると、検死件数139件、再検死数5件、照合判定73件、合計217件であった。生前記録が乏しく照合が困難な例も見られた。エックス線写真撮影に際して、本学放射線科からの遮蔽板設置により現場での被爆軽減策が講じられた。ポケッ

ト線量計による個人の被曝線量測定では1回約12時間の出勤で平均 $0.17 \mu\text{Sv/h}$ であった。

【まとめ】今回の震災で検死業務を担当し「1人でも多くのご遺体を遺族の元にお返しする」ために、困難な状況下での正確な検死の実体験ともに生前記録の重要性を再認識した。

【謝辞】この度の検死派遣に際し、関係諸機関ならびに大学関係各位の深いご理解とご協力に対し、感謝と御礼を申し上げます。

15) 東日本大震災における奥羽大学の取り組み (その2)

○佐々木重夫, 相澤 徳久, 菊井 徹哉, 鈴木 文章
鈴木 史彦, 長岡 正博, 西本 秀平
(奥羽大学歯学部災害支援班)

【緒言】この度の東日本大震災において、本学は社会貢献活動の一環として、身元不明遺体の検死ならびに避難者の口腔管理支援に対処するため、それぞれにチームを編成して取り組んだ。

演者らは、福島県歯科医師会および郡山歯科医師会と連携し、郡山市内の震災避難者の口腔に関する健康維持を目的として避難所を巡回して口腔管理支援を行っていた。

今回は初回活動日である平成23年4月13日からの概要について報告する。

【対象】東日本大震災の翌週3月17日に郡山市の避難所における被災者に対する口腔管理支援チーム(歯科保存学講座3名, 歯科補綴学講座2名, 成長発育歯学講座1名, 口腔衛生学講座1名)を発足した。出向避難所の選択は郡山歯科医師会との協議のうえ、本学から近い場所で郡山市民でない避難者が約100名存在する施設(福島県立郡山北工業高等学校, 郡山市青少年会館, 福島県農業総合センター)とした。活動内容は1. 避難所における歯科関連物資(歯ブラシ, 歯磨剤など: 支援物資に関しては郡山歯科医師会から供給)の整理・管理および搬入。2. 避難者に対する歯科医療相談(治療希望者に対して避難所近辺の歯科医師会会員の医院を紹介)とした。避難所支援日の決定は本学の業務に支障のないチーム各自の日程を調整, 活動時間は9:00~12:00として, 4月13日から活動を開始し, 移動には本学公用車を使用した。

【結果】1. 4月13日から5月31日までの活動

実日数は24日(福島県立郡山北工業高等学校: 3日, 郡山市青少年会館: 12日, 福島県農業総合センター: 9日)であった。2. 5月に入ってから避難者の歯科関連物資に対する希望内容が高度・細分化(軟毛の歯ブラシ, 顆粒入りの歯磨剤, 舌ブラシが欲しいなど)する傾向にあった。3. 3施設において歯科医療相談を受けた者は45名(男性17名, 女性28名)であった。4. 歯科医療相談を受けた者の年齢のうち6歳未満および60歳代~80歳代の合計が80.2%と高率を示した。5. 歯科医療相談の内容は歯周関連(歯肉腫脹, 歯の動揺など), 義歯関連(破折, 作製希望, 紛失など), 齲蝕関連(修復物脱落, 歯の破折など), その他(治療途中の相談, 口腔内診査・刷掃指導希望, 顎関節症, 嚥下障害など)の順に高かった。

【考察】1. 被災してからの時間の経過に伴って、生活に余裕が生じたことによって歯科関連物資に対する希望内容が高度・細分化してきたものと思われた。2. 活動時間が午前中であり, 女性に比較して男性の方が職場への復帰, 職探し, 住居探しなどを行っている者が多いことが歯科医療相談の男女差に反映したものと思われた。3. 通学者や働き手の年齢層が不在なために6歳未満および60歳代以上の高齢者の歯科医療相談が多く, 相談内容についても歯周関連や義歯関連が多かったものと思われた。

16) 東日本大震災における当科の対応

○佐久間珠恵, 宮島 久, 吉開 義弘, 竹内 聡史
御代田 駿, 近藤 祐, 宮嶋 千秋, 宗像 佑弥
(会津中央病院歯科口腔外科)

東日本大震災は史上最大規模の大災害となった。会津中央病院は会津医療圏の災害拠点病院であるが, 今回の災害に対しては, 浜通りおよび中通り地方からの後方支援を担う病院となった。歯科口腔外科では, 歯科口腔外科における医療難民への対応や他科への搬送症例に対する口腔ケアを中心に対応に当たった。今回, 演者らはその対応内容について, 実態を把握する目的に本検討を行ったので, その概要を報告した。対象は東日本大震災後, 当院に救急搬送および転院搬送された143例(以下, 口腔ケア群), および, 当科外来を受診した46例(以下, 外来群)とし, 口腔ケア群は医科カルテおよび口腔ケア施行時の当科チャート,